

「イエスさまのたとえ『一匹の羊』」

ルカによる福音書 15章1～7節

学務部キャリア支援課アシスタントマネージャー 松村 正

- 1 小さい羊が 家をはなれ ある日遠くへ あそびにいき
花さく野はらの おもしろさに 帰る道さえ わすれました
- 2 けれどもやがて 夜になると あたりは暗く 寂しくなり
うちがこいしく 羊はいま 声もかなしく 泣いています
- 3 情けの深い 羊飼いは この小羊の あとをたずね
遠くの山々 谷そこまで 迷子の羊を さがしました
- 4 とうとうやさしい 羊飼いは 迷子の羊を みつけました
抱かれて帰る この羊は 喜ばしさに おどりました (讃美歌 21・200)

ルカによる福音書15章1節～7節を読むたびに、思い起こされる讃美歌です。この歌詞を辿りながら「おや？」と思われた方もいらっしゃるでしょう。ルカによる福音書と照らし合わせると、その違いが見えてきます。讃美歌の主人公は小さい羊です。自由に飛び出して遊び惚け、迷子になっているところを見つけてもらい、ああ良かったと！と喜んで帰る…というもの。それに対して、聖書の主人公は羊飼いです。

ファリサイ派の人々や律法学者たちは、徴税人や罪人のことをイエスさまが分け隔てなく受け入れてくださることに我慢がなくなり不平を言います。これに対して、イエスさまが語ったのが、このたとえでした。イエスさまは「一匹の羊を見失う」という具体的な話しに置き換えて語り、「もしそうになったら、自分が～どうするかを考えてごらん下さい」と問いかけます。

この物語は「九十九匹対一匹」の話ではなく、「百匹の中の一匹」を言い表しているのだと思います。言い換えれば、「百匹の中の一匹とは、百匹百様。どの一匹も大切」「いなくなったら、必ず探し出してくれる」ということなのではないでしょうか。この一匹なら探しに行き、あの一匹なら探しに行かないという価値はない。ということでは決してないでしょう。一匹を見失った羊飼いは、必死に探します。讃美歌では見つけてもらって喜んでるのは羊でしたが、聖書では羊飼いです。

このたとえ話の羊飼いは、誰のことを指しているのでしょうか。「悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にある。(7 節)」にあるように神さまのことだということが明確に示されています。そのように考えると、このたとえ話で大切なことは「悔い改める」ということなのではないかと思うのです。「悔い改める」には「心を変える」「立ち帰る」という意味がありますが、羊は「これからは、羊飼いのそばから離れません」などと反省の様子を見せたり何もしていません。あるのは見失った羊を、必死で探し回る羊飼いの記述ばかりです。

私たちのことを大切に思って、懸命に探してくださるその神さまのまなざしの中に、私たちはいます。このたとえ話の中の悔い改めとは、「探しに来てくださった神さまの方に、しっかり担がれる」という意味ではないかと思えてなりません。

羊というのは、とても近眼だと言います。いつも下を向いて、目の前の草を無心に食べるだけ。だから、知らないうちに群れから離れて迷ってしまうこともこともあるし、一度迷ったら、自力で帰ることができないこともあるそうです。私たち人間も、羊によく似ているのではないのでしょうか。自分の目の前にあることだけしか見えなく、一喜一憂するばかり。迷子の羊そのものです。そのような私たちを見つけ出して、肩に担いで下さる神さまに委ねて歩んで行きたいと願うばかりです。

主なる神さま

ルカによる福音書を通してあなたの御言葉を聞けたことを感謝いたします。私たちは、小さく弱く貧しいものです。私たちにあなたがいつも隣にいてくださり支え道を示してください。アドベントの季節を迎えています。このような時期だからこそあなたの御子イエスキリストを私たちにお与えくださった意味を静かに考える時期をしてくださいますように。

この一言の感謝と願いを、お一人おひとりの祈りに合わせ、イエスさまのお名前を通してみ前におさげいたします。アーメン

2021年12月2日 聖学院大学 全学礼拝